
メガネの魔法 3 ～飲み会で気付いた事～

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネの魔法 3 〱 飲み会で気付いた事〱

【Nコード】

N5954P

【作者名】

シマ

【あらすじ】

私、遠藤裕美20歳。彼氏いない歴〱年齢のメガネっ子。会社の飲み会に誘われて行って見たものの……「メガネの魔法」その3。裕美と課長は飲み会で……

「飲み会ですか？」

「そう、親睦会と言う名のね。どうする？」

同僚に急に誘われた飲み会。私には、頭の痛い話だった。

「男の人も参加するんですか？」

「そうだよ。どうして？」

「その……話するのが苦手で」

そう、お酒が飲めない訳ではなく、どちらかと言えばお酒は強い。しかし、黒い髪に童顔の私が飲むと周囲はドン引き。趣味は車なのだから、未だに彼氏のいない理由はそこにあった。

「慣れる為にも参加してみない？色んな課の人がくるし、丁度良いかもよ」

「……そうですね。たまには良いかも」

慣れる為と勧める言葉に誘われて承諾すれば、同僚は不穏な言葉を残して立ち去った。

「遠藤は参加と……これは、男性参加者が増えそう」

「え!？」

増える? まさか! 無理矢理セッティングしないよね!? 以前のお見合いの様な飲み会を思い出し、眉間にシワが寄った。昔の二の舞はごめんだ。……当日は、部屋の角で大人しくしていよう。

三日後 飲み会当日、職場から直行した会場で私は絶句した。広い座敷にウジャウジャと集まる人の数。五十人ほどが男女入り乱れて、始まっていた。

「遠藤ちゃん! こっち! こっち!」

名前を呼ばれて視線を向ければ、同僚が数人集まっていた。知った顔を見つけて胸を撫で下ろすと、すぐにその場に座った。

「何ですか、この人数は……」

「それが山崎課長も参加するってなったら、こんなになっちゃってね」

「課長も来るんですか!？」

私が驚いてあげた声と、後ろから黄色い喚声が重なり振り向くとスーツを着崩した課長が入って来るのが見えた。

「……すごい人気ね」

「確かに……睨まれたくないので、来ないで欲しいですね」

私がボソツと漏らした本音に、一瞬静かになった同僚は大爆笑した。

「遠藤ちゃん、気持ち良いぐらい言い切ったね。課長に怒られるよ」

「知りませんよ。私は、静かに飲みたいんです！」

「何を飲むの？」

差し出されたメニューに並ぶチューハイにため息を漏らすと、日本酒に気付いてジツと見た。頼みたい。チューハイはジューズみたいで飲んだ気がしない。うーんと悩んでいると、後ろから聞こえた声に硬直した。

「遠藤さんも参加なんて珍しいね」

「……」

ニコニコと笑顔を浮かべて隣に座った課長が、私の手元のメニューを覗き込んできて、今にも身体が触れそうな距離。痛い視線をヒシヒシ感じて、私は逃げる打算を考えていた。

「私は、日本酒のお冷やが良いです」

わざとらしい笑顔で注文を告げると、回りは絶句した。ああ、やつぱり意外なんだ。ちよつとショックだ。

「へえ、遠藤さんも日本酒、飲むの？私も同じものを」

同じもの！？驚いてまじまじと課長の顔を見ていると、皆に分らない様にウインクした。うーん、何を考えているか分かんない。

手元に届いた日本酒を課長と二人で飲んでいると、入れ替わり立ち代わり男の人が話しかけてくる。

大概の人は、手元の日本酒と課長の顔を見ると話しもそこそこに退散したけど……私と同じペースで飲む人、初めて見た。

「課長は、お酒お強い方なんですネ」

「そうでもないな。うちの家系は、これくらい飲めないと親戚の集まりには行けないな」

「それは……お酒代が半端ないですね」

素直に思った事を言えば、課長は肩を震わせて笑っている。何かおかしいのか分からずに首を傾げた私の耳元に、わざわざ顔を近づけて低くうつとりする声で囁いた。

「そんな事を言ったのは君が初めてだよ」

「……近いです」

「何が？」

しれっと楽しげな課長にイライラしながら身体をずらすと、肩を抱かれて引き寄せられる。

「放して下さい」

「いい匂いがする……」

「酔ってますか？」

「いや……そうだ、イチが拗ねてゲージから出てこないんだ。今度、家に遊びに来てくれないか」

「イチ君が拗ねた？」

「ああ、この間、イチを置いて出掛けたからな。君に会いたくて仕方ないらしい」

飼犬”イチ”の名前を出されては断れない。実際、私も会いたい。多分、お酒も手伝ってか、言ってしまった。

「良いですよ。イチ君に会いたいですし」

「彼氏が勘違いしない？」

「彼氏いないです……外見と中身のギャップが激しいから……断られて」

「そりゃ、バカな奴ばかりだな」

えっと……あれ？私、課長となら普通に話してる。変な緊張も下手な嘘もいらないんだ。

「……課長となら普通に話し出来るんですけどね……他の人はちょっと……」

そう言うとき課長は目を丸くして私の顔を見ている。そんなに変な事を言ったかなあ？と不安に思っていると、課長はゆっくりと眩しいほどの笑顔を見せた。

「期待してもいい？」

頬が赤くなったのをお酒のせいにして、私は黙って頷いた。

気付いたら、課長の事が好きでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5954p/>

メガネの魔法3～飲み会で気付いた事～

2010年12月22日22時02分発行